

2024年5月28日

2024年度奨励賞授賞理由

日本教育学会奨励賞委員会

【授賞論文】

桐田敬介「声の多元性、複数の現実性、その衝撃——マキシン・グリーン」の文芸的アプローチとアーツ・セントラルリティをめぐって——『教育学研究』第90巻第4号、2023年12月、551-562頁

【授賞理由】

本論文は、マキシン・グリーン」の哲学への国内外の先行研究における評価および批判を丁寧に検証することで彼女のフェミニスト教育哲学者としての特質を浮き彫りにしている。そのうえで、被抑圧者の「声」への気づきをもたらす「衝撃」を自らの「声」として表現していくことをグリーンが標榜していたことを強調している。グリーンにとって、そのような「声」を反映した文芸的エクリチュールの絶えざる生成が、日常生活において隠蔽されてきた抑圧的な社会状況を問題化する政治的な作用を生み出すという点において重要であった。最終的に著者は、多様なアートのなかに「さまざまな声」を想像することを目指すグリーンのカリキュラム構成論の意義を検討し、その再評価を行っている。

著者は、グリーンによる思想の検討のみならず、それを彼女のカリキュラム論の問い直しに接続することによって、現代社会が直面する教育の問題を論じることを試みている。そのような課題への取り組みを通して、著者は抽象と具象の間を往還する自らの力量を示している。広義のカルチュラル・スタディーズを礎とする本論文の内容は分野横断的で、教育哲学、教育社会学、カリキュラム論、芸術教育論、政治教育論などとの関連性を有している。著者は言わばそれらの中間に立ちながら、その視野の広さと豊富な知識に基づいて、教育学にとって重要な課題（「声」を主題とする政治学的な教育学）をグリーン」の思想から抽出することに成功しており、その点が評価された。「甘い言葉」「非認知的な言葉」と批判されることもあったグリーン」の「文芸的」かつ「芸術的」な文体は、その文体によってしか乗り越えられない社会と個人の課題を目前にしたときの、彼女の懸命の応答であった。本論文はそのことを説得的に示している。著者が評価しているグリーン自身の「声」の実践と密接に結びつくアートを軸にした教育の可能性は興味深い。

審査では次のような指摘もあった。思想的な観点からは、グリーンが置かれた歴史的な社会状況に関する情報を厚くすることで、そのような文脈下における彼女の思想特徴をより精密かつ説得的に論じることができるのではないか、という意見が出された。また、本論文では、周辺化されている子どもの「声」の問題に回答する創発的カリキュラムの構成を外挿的に拡張していく可能性が示唆されているが、著者がこの点を今後どのように展開していくかが期待される。

これらの指摘は、著者の今後の研究への期待の高さを示すものである。著者も示唆しているとおり、本論文によって開かれた議論の範囲は、セクシャリティ、ジェンダー、エスニシティ、階層、経済状況に関する「声」の問題とも連動しつつ、いじめや不登校を含む子どもの多様な「声」の問題系に拡張していく可能性を有している。本論文は、以上の通り、テーマの重要性、先行研究に対する検討の妥当性、論の展開の重層性、現実社会の問題との関連性の観点から、日本教育学会奨励賞にふさわしい研究として評価できる。